



1. 教育投資
2. 事故の記録は克明に残せ
3. 学生運動に考える
4. “雪降る工業国日本”の土木技術者

1. 大学受験シーズンが終り今年も大量の浪人が生じたようであるが、前途ある青年達が挫折感に苛まれながらつぎの年を生きて行かねばならないというのは、個人的のみならず社会的にも実に大きな損失だと言えよう。

世の中には、浪人までして大学へ行くことはないとか、教育を投資と考えた場合高校卒の方が効率が良いなどという議論が盛んである。それにもかかわらず、今後も大学進学希望者は、ますます増加するであろう。それは、社会の進歩につれますます学力が要求されるからであって、学力は大学において養うのが最も効果的だからである。一時騒がれた学歴無用論も、裏を返せば学力有用論となっていた。つまり、大学へ進むということは、個人的欲求が社会的要請に一致した結果ともいえるのである。その効果については、身分制を固持し大学教育を一部のエリートに限定したイギリス社会の停滞をわが国の状況と比べることにより明瞭となる。

ここで社会の役割はいたずらに進学を非難することなく、一層大規模な「教育投資」をすることである。それにしても、先だつての裏口入学事件の関係者が土木工学の教授であったとの報道ほど、われわれ土木技術者を悲しめたものはない。虚報であつて欲しいと願うのは筆者だけではない。 [C]

2. 1 昨年1月、札幌雪まつりからの帰りの客を乗せた全日空のボーイング 727 が、東京湾に墜落した原因を究明する事故調査団の中間報告が発表され、近いうちに報告書作成に入るという。それによると、墜落は結局不明で、有力な手がかりとして考えられていた操作上のミスとエンジンの故障などからは、いずれも決め手となるものが得られなかったとしている。このことは、事故の再現がきわめて困難であること、また実験的裏付けがなく単なる推定だけでは結論を出せないという、技術者として持つべき当然の態度の厳しさを、今さらながら感じさせるものである。航空機の設計にとって、あらゆる事故の可能性についての検討が必要である以上、今回のような事故は、尊重すべき資料として取り扱われるべきであり、一連の事故に関する情報の積み上げとして活用すべきものである。自然を相手とする土木工事の場合にも、このような問題に直面することが少なくない。土木技術者としても事故調査の記録はつぎに残して、つぎの事故防止に役立たせるようにしなければならない。 [J]

3. エンタープライズの佐世保入港に反対する学生運動は、安保闘争以来の世間を騒がせたできごとであった。一部の学生の行動ではあるが、少なからず世に迷惑をおよぼしたのは、非常に残念なことであり、一方警備の行きすぎが、かえって一部市民の同情を学生に集める結果になったのは皮肉なことであった。

入港問題は、現在の日本の情勢、地位、立場の一半を端的に表わした時事の一駒であり、この判断は立派な大人でもまちまちである。まして学生がこれをどう判断しようと決して責められない。しかし、これが何故に角材と棍棒の争いにまでならなければならないか、その遠因が実に気がかりである。

彼等にはもっと長い目を持ち、自らの将来に大きな夢を持って貰いたい。世相の一駒に全精力を傾倒するよりも、夢を将来にかけて、彼等のもつあらゆる能力が生涯を通じて最大に発揮できるように、勉学と修養に勤めて貰いたいし、また彼等の行動を叱正する周囲の人達も、彼等の将来にも夢を託し、できることなら学生運動をも将来には貴い経験として、世間に対する感謝の気持ちで思いおこすことができるようにしてやりたいものである。 [S]

4. 2月15日の全国的な降雪は、各所に記録的な大雪をもたらした。死者まで出す仕末であった。東京も年来の大雪であるとかで、国電・私鉄からバスに至るまで満足に動いたものはなく、ラッシュは夜遅くまで続いた。明けて16日も、午前中は雪との闘いが続いて職場の話題を独占していた。世論は雪で止った交通施設には意外に寛大で、雪国から東京に出てきた一部の人々が雪に弱い大都会の非をせめていたのが特に目立った程度であった。東京の場合たかだか10cm ぐらいの雪でその機能が止るのも考えものであるが、そうかと言って、10年に一度の大雪に備えて普段から準備を整えておく国力がすでにあるかと言えば、これまた疑問であろう。しかし、1000万人を越える人口を誇る大東京、そしてますます巨大化してゆくであろう東海道メガロポリスの公共基盤をあづかる土木技術者として、また雪降る工業国日本の技術者として、こう言う面においてもはずかしくない仕事をしたいと考えたいのは、決して許されない願いではないと思うのだが、どの辺に妥協点を見出すか、今後の大きな課題と言えよう。 [E]